
光と影

篠沢くるみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と影

【Nコード】

N6936K

【作者名】

篠沢くるみ

【あらすじ】

クリスマスの夜。天涯孤独の少女に、救いの手が……。

微かな光【EP1】

クリスマスなんて大嫌い。

街角ですれ違う楽しそうな家族連れや恋人たち。

私は一人ぼっち。だから、クリスマスなんて嫌い。

あの頃は良かった。

お母さんも居た。お父さんも居た。お姉ちゃんも居た。好きな人も居た。

なのに、突然居なくなっちゃうんだもん。

私は、独りじゃ何も出来ない。

いなくなつてほしくなかった。

なのに、みんな……みんな消えちゃった。

私は何も悪い事、してないのに。

幸せそうな、暖かそうな光をワザと避けて通る。

なにも、見たくなかった。

私は不幸な人間だから、幸せな人たちとはわけが違うから。だから、同じ空気になんて浸りたくもない。

肩を落とし力をなくしたように、私は歩く。

ある街角を曲がろうとしたとき……

誰かとぶつかった。

高校生くらいの男の人だった。

私は勢いよく吹っ飛んで、白い雪の上に転んだ。

「大丈夫かい？」

声をかけてもらった。

でも、余計なお世話。痛みなんてもの、全然感じないし……。

「すごい傷だらけじゃないか」

その男は、小さな私を抱きかかえると、どこかへ駆けていった。
私は、彼の胸の中で揺れながら、眠りについた。

ぬくもり【EP1】

彼は病院の息子だった。

私は、あのあとその病院に連れて行かれ、治療を受けた。

真っ白の部屋で目が覚めた。

隣を見ると、あの男の人がいた。

「やっと目が覚めた？」

彼は優しい目で、言った。

それと同時に、私の目から何かが溢れてきた。

それは涙だった。

なんでそんなものがでてきたのかは、分からない。

分からないけど、涙が溢れてくる。

なんだ。私は一人ぼっちじゃないんだ。

こんな風に私を助けてくれる人がいる。こんな風に私に優しい目をしてくれる人がいる。

私は、一人じゃなかったんだ……。

「調べさせてもらったよ」

…！

突然優しい声から鋭い声に変えた彼に、私は、肩を震わせる。

彼は、続けた。

「君、あの事件の生き残りなんだって？」

私は、目を大きくさせる。

あの事件とは、私の家族を襲った……あの、事件……。

「……」

彼は、じつと私を見つめている。

何か、私の口から何かを発するのを待っているかのよう。
でも私は、何も言い出せなかった。言いたくなかった。

体を覆った真っ白のシーツを、シワのできるくらいに握り締める。
それを見た彼は、察したように、私の頭を優しくなでた。

「つらいこと、思い出させちゃったね」

また、優しい目で…優しい声で、囁いてくれた。

私は心を許した猫のように、その手に甘えた。

彼の手も、優しくかった。

離れたくない。

私は、いつの間にか彼に恋をしてしまっていた。

影【EP1】

私は、彼の家の養子となった。
彼の家族はみんな暖かった。
今年のクリスマスは、幸せだった。

ああ、ありがとう神さま。
これはあなたからのクリスマスプレゼントなのですね。
なんて、なんて素敵なプレゼント。
ああ、あの頃に戻ったかのように。

新しいお母さん、新しいお父さん、新しいお兄ちゃん
私の、大切な……もう一つの家族。

一年後……再びクリスマス。

私は彼とオシャレをして街へ出た。

暖かい光に包み込まれて、幸せだった。

暗闇を纏ったあの頃の私は、もう私の中にはいない。

神さま、

神さま、

本当にありがとう。

なんとなく、私は目を向けた。

その場所は、私が以前歩いていた光のない街角。

そこに、私の姿があった。

なんで、私が、いるの……？

ボロボロの服を着て、力なくしたように歩いていた。

そして、あの角を曲がる。

私は、気になった。気になって気になって仕方がなくて、彼を置いて、走り出した。

そこにあつたものは……。

さつきよりも酷い、私の姿。
全身血まみれの、私の姿。

私は、周りを見渡した。

誰がこんな事をしたの！？

叫んでも、だれも、だれも返事をしない。

ねえ、起きて！
起きてよ、私！

ピクリともしないボロボロの私を、何度も何度も揺り動かす。
何度も何度もそれを繰り返しても、その少女は動かなかつた。

どうして…？
どうして……？

あなたは……あなたはこれから、幸せになるんじゃない。
どうして？
どうして？

「あはははは」

甲高い声に、私は我に戻る。

笑い声のした方向に、私は振り返った。

そこにいたのは、あの男の人。

見たこともない女と一緒に、楽しそうに並んで歩いていた。

どうして……？

私は、腹が立った。

二人きりで街に出たはずだったのに、それなのに彼は……別の女と。頭にきた私は、突っかかるように彼の傍へ寄ると、大きく叫んだ。

何してるのよ！？

この女は誰！？

あなたに、彼女が居たなんて知らなかった！！
私を騙したの！？

キツと、睨んだ。

私には、自信があつたから。

ずっと、ずっとずっと一緒にいてくれた彼だもの。

私を……私を裏切るはずがない……！！

パンッ

思いつきり、弾かれた。

そして、彼は、こう言い放った。

「きたねえ餓鬼だな」

……え？

「やあだあゝ、何言ってるの。ゆーちゃん」

隣に居た女が、笑いながら言った。

「餓鬼なんてどこにもいないじゃない。変なゆーちゃん」

そんな彼女の態度に、彼もつられておかしそうに笑った。

女には、私の姿が見えなかったようだ。

でも、彼にはちゃんと見えていた。

だって、見えていないなら、二人が去るとき、私をあんなにも凝視する？

鋭い目で私をじっと見つめていた。

怖かった。

そして……怖いのはこれだけじゃない。

私は、一体なにものなの……？

そういえば、さっきの『私』は！？

急いであの角に向かった。

そこに、私は居なかった。

どこに行ったのか、分からない。

でも、彼女は確かに死んだであろう。

そう、私も……死んでいる。

クリスマス【EP2】

俺は、子供大嫌いだ。

いつもギャーギャー騒いでうるさい。

クリスマスなんて、とくに。

俺が幸せだと感じる時間は、彼女の麗華と一緒にいるときだけ。

「おはよう、ゆーちゃん」

毎朝起こしてくれる麗華。

明るくて優しく、頼りがいがあって、なんでもテキパキこなす。
完璧な女だ。

こんな女、世の中そういないだろう。

中学の時からずっと、片思いだった。

俺は引っ込み思案で、なかなか話も出来ずにいたっけな。

話した事と言ったら、係りや委員会でのちよつとした会話くらい。

二人で、ちゃんとした話なんてしたことなかった。

高校生になると、麗華とは別の学校になってしまった。

だが、奇跡が起きた。

友達の誘いで合コンにつき合わされた日……なんと、彼女がその席にいたのだ。

俺は勇気を振り絞って、彼女に自分の気持ちを伝えた。

すると、返ってきた答えは……

「私もずっと、気になってたのよ」

嘘だろうと思った。

付き合おうと、すぐに言われた。

何かの間違いだろうと思った。何度も思った。
でも、彼女は真剣だったようだ。

突然の事に戸惑ったが……

ずっと好きだった人と一緒になれるなんて、とても贅沢な事だ。

少し時間を貰って、翌日俺はまた告白をした。

俺たちは、付き合うことになった。

「ゆーちゃん、起きなってば」

俺が気持ちよさそうに寝ているというのに、麗華は布団をめくり上げる。

「よせよ」

「寝起きのゆーちゃん、かわいい」

そう言うと、俺にまたがって、キスをする。

俺はあんまりイチャイチャするのは好きじゃない。

だが、こうして甘えてきてくれる気持ちは嬉しい。

ただ、照れくさいだけ。

大人しく照れている俺に、麗華は無邪気に微笑んだ。

「ねえ、今日は何の日か知ってる？」

「さあな」

「ほら、今日ってあれだよ」

「お前の誕生日は夏だろ」

「もお、違っつてば。大切なイベントがあるじゃない。冬に」

冬に……？

ああ、俺の大嫌いな、クリスマスの日……か。

どうして、麗華はこんな餓鬼みたいな日を楽しみにしているの
だろう。

噂【EP2】

無理やり麗華に街へ連れて行かれた。
まだ朝早いから、子供の姿はなかった。
俺は、ほっと胸をなでおろす。

「本当、ゆーちゃんは子供が苦手なのね」
「……」

「ま、仕方ないわよね。中学の時、あんな目に遭ったんだものね」

「…おい」

「ああ、ごめんなさい」

麗華にはいくつか悪い癖がある。

口が滑りやすく、噂好き。そして、思い込みが激しい。
だが、それさえなければ İyi 女だ。

普段よくしてもらってるんだから、文句も言えない。

「ゆーちゃん、知ってる？」

「なんだよ」

「街角のお化けの話」

「お化け？」

でた。麗華の噂好き。

「例の街角にね、小さな女の子の霊が出るのよ」

「それがどうしたんだよ」

「その街角で女の子の霊とぶつかるよね、ぶつかった子は必ず死んじゃうんだって」

「興味ないな」

「ゆーちゃん、怖いのか？」

「んなわけねーだろ？　つか、見たことあるのかよ。その霊」

「それがいるのよ！　友達も見たって言っただもの！」

「見間違いだろ？　女の子なんかそこらに沢山いるだろうし」

「うっん、あれはお化けよ。だって服とかボロボロだったし。きつと事故で亡くなったのよ」

「はいはい、思い込みはよくないぜ？」

「思い込みじゃないわよ。ちゃんと見たの！」

「もういいよ、そんな話……」

パシンッ

突然ぶたれた。

「なんで信じてくれないのよ…！」

そう言つと、麗華は一人でさっさと歩いていく。

こんなことは良くある。

だから、たいして大変な事でもない。

最終的に、寂しくなつて戻ってくるのは麗華の方だしな。

俺は麗華とは逆の道を歩く。

とりあえず、暇だったから、その辺をぶらぶらすることにした。

家に帰つても、患者とかたくさんいるから親には邪魔者扱いされるだろうし、

麗華の家に戻つて二度寝しようにも、そういう気分にはなれなかった。

謎の少女【EP2】

足が棒になるくらい歩いた。

疲れたから、近くにあった公園のベンチで仮眠をとる。

それから何時間も経って、俺は目を覚ます。

辺りは、子供がたくさんいた。

ああ、もう夕方か……。

俺は子供を避けるようにして、公園を出て行く。

麗華と別れた場所までたどり着くと、急に街を探検したい気持ちになった。

さっきも探検していたが、それよりも、もっと細かい場所まで探りたくなった。

子供と会うのが嫌、という気持ちもあつてのことだったが、それだけじゃなかった。

急に好奇心がわいたのだ。

俺は、クリスマス街とは真逆の真っ暗な道を歩いてゆく。

なんだか居心地が良かった。明かりばかりが照らされている街よりも、気分がいい。

調子に乗って口笛を吹きながら、俺はある街角を曲がろうとした。そのとき……

どんっ

小さな何かとぶつかった。

前を見てみると、小さな女の子。

少し離れたところに、倒れこんでいた。

「大丈夫かい？」

そう言いながら少女の姿を見ると、酷い姿だった。

血まみれで、もう死んでしまってるんじゃないかと、本気で思った。
だが、なんとか息をしていた。

俺は慌てて自分の家へ、少女を抱いて向かった。

想い【EP2】

少女はなんとか助かった。

しかし、意識はなかなか戻らなかった。

俺は、付きっ切りで看病をした。両親や看護師さんものアドバイスを貰いながら。

ある日、病室で父親に声をかけられた。

神妙な表情で、俺の顔を見ていた。

「なんだよ」

「……あの子の親が見つからないんだよ」

「え？」

「このままだと、施設に送り込むしか……」

し、施設……？

「おい、待ってくれよ！」

「……なんだ」

「知ってるだろ、親父も。あの施設はやばいってこと」

「……」

「そんなところに、こんな女の子……送り込むなんて……」

「……じゃあ、どうするんだ」

「養子にしてやってくれよ」

「……」

「……」

「……また、か」

「……」

父親は、真剣に考えてから、少し経って首を縦に振った。
俺は、嬉しくなって、その場で頭を下げた。

「言っておくが、私も大変なんだぞ」

そう言っつて、病室を静かに去っていった。

父親のその言葉は、俺の心にぐさりと深く刺さった。

2年経って、ようやく少女は目を覚ます。

「やっと目が覚めた？」

少女は、俺を見るなり泣き崩れる。

生きている事に安心したのだろうか？

詳しくは分からないが、そんな少女を見ると、とても癒された。

俺は2年の間に、彼女のことを色々調べた。

彼女の服のポケットに財布があつて、母が持たせたであろう封筒が入っていた。

何年も前のものらしく、その封筒はボロボロになっていたが、住所や母の名前をなんとか確認することができた。

調べた結果、この少女は、ある殺人事件に巻き込まれている。

その事件で、母・父・姉、そして親戚の男の子を亡くしていた。
犯人は未だ見つかっていない。

「調べさせてもらったよ。君、あの事件の生き残りなんだって？」

すると、少女は当時のことを思い出したのか、目を大きく見開かせ、

怯えだした。

俺は、こういう立場になったことがないから、
つい無神経に、彼女の記憶を抉りだすようなことをしてしまった。

「つらいこと、思い出させちゃったね」

震える彼女を落ち着かせようと、優しく頭をなでる。

そのうち落ち着いてきたのか、見上げようにして俺に微笑んでくれた。

俺はこの時、初めて人を守りたいと思った。

子供なんて、大嫌いだった……この俺が。

真実【EP2】

養子になった少女は、俺の妹になった。

彼女も俺を兄のように慕ってくれる。

彼女の名前は佐奈。

よく街へ出て一緒に買い物をするようになった。

佐奈が、俺の性格を変えてくれたような気がする。

今日はクリスマス。

今までは大嫌いだったクリスマスだけど、もうそんな気持ちはない。
夜は家族と一緒にクリスマスパーティーでも開こう。
きつと、佐奈も喜ぶだろう。

そのうち佐奈にも友達ができた。

佐奈を公園へ遊ばせておいて、俺は街へ買い物へ出かける。

赤信号の横断歩道に並んでいると、後ろから声をかけられた。

麗華だ。

「久しぶりね」

「そうだな」

「なんで、戻ってきてくれなかったの？」

「用事があったんだよ」

「本当に？」

「本当だよ。調べものとか色々あって、部屋にこもってたんだぞ」

「二年間も？」

「……悪いかよ」

「てつきり、新しい女でも見つけて、この街から出て行っちゃったんじゃないかと思ったわ」

「あいつじゃねえんだし、そんなことしねえよ」

「ま、それもそうよね」

それから沈黙しあう。

数秒経つと、信号が赤から青へと変わった。

「じゃあ、俺、こっちだから」

「ねえ」

急に腕を掴まれた。

「なんだよ。また赤になるだろ」

「あんたに言っておきたい事があつたのよ」

「は？」

「……私、あんたのこと好きよ。でも本当は……違うのよ」

「な、なんだよ」

「あんたの弟が好きなのよ」

「え……」

「でも、あんたの弟、さつさと女作って、高校なんか都会のすごいところ行っちゃって……」

「……」

「だから私、あんたにしたのよ。……だって、顔が一緒なもの」

「じゃあ、あの合コンの時、言った言葉は……？」

「あれは、あんたの弟のことよ。……悪かったわね。騙して」

「……」

俺は急に恥かしくなって、横断歩道を走り出した。

向こう側まで走り抜けると、麗華の方に振り返る。

麗華は、待ち合わせの場所で誰かに手を振っていた。

その先を見てみると……

「あいつ……」

そこに居たのは、普段ならここに居ないはずの……弟の姿。
俺は悔しくなった。

俺はずっと麗華に騙されていたんだ。

さっさと買い物を済ますと、公園へ向かった。

五人くらいの子供が遊んでいた。

佐奈はどこだろう……

必死に探したが、佐奈の姿はどこにも見当たらない。

「ちょ、ちよつといいかな」

佐奈と一緒に遊んでいた友達に、声をかける。

佐奈はどこに行ったんだ？と聞くと、

あの後こっそりお兄ちゃんについて行く、と言ってそれっきりらしい。

俺はもう一度、街へ向かった。

事故に遭ったのかもしれない。

事故に遭ってしまったのなら、それは俺のせいだ。

どうしよう。

どうしよう。

どうしよう。

せつかく、佐奈を幸せにしてやろうと、そう決めたのに。

「佐奈あああああああー！」

叫んでも、返事なんて返ってこない。

俺が買い物しているときに通った道を全て回った。
なのに、どこにも佐奈の姿はない。

何やってるんだ、あいつは。

なんで、なんでどこにもいないんだよ……！？

もう当てがなくなり、俺は再び公園に戻ることにした。

ずっと一緒に…【EP2】

佐奈は、一人泣きながら公園のベンチに座っていた。

「佐奈……！！」

俺は、安心して佐奈の名前を叫びながら、抱きしめた。

「お兄ちゃん……」

「どこに行ってたんだよ。心配しただろ」

「内緒でお兄ちゃんを追いかけようとしたけど、人が多くて、見失っちゃって……」

「そ、そうか」

「お兄ちゃん、いなくなっちゃったから、怖くて……だから公園に戻って待ってたけど、なかなか帰ってこないから、もっと怖くなっちゃって」

ポロポロと、大粒の涙をこぼしながら、佐奈は言う。

「私、心配させちゃった……。ごめんなさい」

「いや、気にするな。でも、もう勝手に一人でどこかに行くんじゃないぞ」

「……ごめんなさい。もうしないから」

佐奈は、しゃっくりをしながら、何度も何度も謝った。

俺は、佐奈の頭をわしゃわしゃと撫でてやる。

でも良かった。せつかくのクリスマスが、最低な日にならなくて。

「今日は、幸せな日にしてやるからな。佐奈」

そうして、俺は彼女に微笑んだ。

最期【EP2】

あれから一度家に戻った。

辺りが暗くなった頃、また、佐奈と一緒にクリスマス街へと出掛けた。

「欲しいものとかあったら言えよ？買ってやるからな」

「本当に？わーい。お兄ちゃん、優しい！大好き！」

そう言いながら、俺たちは手をつないで歩く。

また、離れ離れになったら大変だからな。

明るい光、幸せそうな人々。

ああ。俺も、佐奈も、幸せな人の仲間入りなんだ。

もし、佐奈に暗い人生が待ち望んでいたとしても、俺が絶対に守ってやる。

ああ、決めたさ。そうする。

佐奈は、俺が絶対に。絶対に守ってやる。

「お、お兄ちゃん……」

佐奈が突然、なにか恐ろしいものでも見るような声で、呟いた。

「どうした？」

「……あ……あう………」

佐奈の目の先には何もない。が、佐奈には何かが見えているのだろうか。

「……！」

つないでいた手を、佐奈が離した。
そして、なにかを追いかける。

俺は、一瞬戸惑いかけたが、すぐに彼女を追いかけた。

「待て！佐奈！！」

——どんッ

鈍い、強い音が……街に響いた。

走り出した佐奈は、たまたま走っていた自転車にぶつかったのだ。
……俺と佐奈であった、あの『街角』で。

慌てて、俺は佐奈の傍へ駆け寄る。

「佐奈ああああッ！？」

頭の打ち所が悪かったのか……既に息を、していなかった。

ドクドクと赤い血が、頭から流れ出る。

どんなにおさえても、止まりそうにない。

どんどん手が赤く染まっていく。

悲しみと悔しさと恐怖で、出てくる涙も出てきやしない。

ああ……

俺は一体何をしていたんだ……？

麗華【EP3】

中学の時、好きな人がいた。

その人は、たいしてかつこいいわけでもない。

頭が特別いいわけでもない。

でも、惹かれたの。

だって、男の人に優しくされたのなんて初めてだったから。

私は、麗華。

中学二年の時、崎狭間中学校に転校した。

そのとき出会ったのが、優一。

そして、弟の雄二。

私は、どちらかと言えば人見知りで、人と会話なんて面倒でよく避けていた。

そもそも、男子も女子も嫌いだった。

いつも孤立している私を、男子はかつこいいとかお嬢さまっぽいとか言って騒いでたけど、

本当の私は、ヘタレだし、甘えん坊だし、家では男勝りで部屋は汚い。性格ブス。

勝手に雰囲気だけで好きになる男子どもが馬鹿らしくて、近づく事さえ嫌だった。

そしたら、女子は調子に乗ってる。ってね。

前の中学の時と一緒。

女はどうしてああやってグループ作って、

トイレでコソコソ人の厭味ばかり言って……あーあ。馬鹿みたい。吐き気がするわ。

私はあんな女子とは違う。

でも、皆と違う事をすれば、周りは私をおかしいという。

私はおかしくなんてない。

おかしいのは、周りの人たちよ。

そんな、人から見ればおかしい私に声をかけてくれたのが、優一。そうね。言ってみれば、初恋だったわ。

優一は心の優しい人だった。

言葉遣いはあんまり良くなかったけど。でも、見てて分かるの。こいつは悪いやつじゃないってね。

だから、好きになれた。純粹に恋をした。

でも、女って怖い。

「麗華さん？優一君は私が先に目をつけたのよ」

だって。

その後、ひどいいじめに遭うの。

別に辛くななんてなかったわ。

一番かわいそうなのは、……優一の方よ。

女子全員に「。。か、麗華、どっちか選びなさい」だなんて脅されて。

心の優しい優一は、何にも言えず、ただ黙ってた。

黙ってたなら、女子たちはまた騒ぎ出すの。

。。の居ない時に、誰も来なさそうな場所に優一を呼び出して、いじめたのよ。

人間不信になった優一は、学校に来れなくなった。それくらい傷ついたのよ。

それでも私はのうのうと学校へ来ていた。

精神の強さの違いもあるでしょうけど、でも、優一の方が大変だったに違いないの。

優一のお見舞いに、家へ行ったとき、……その時初めて雄二に出会った。

雄二は優一と違って、なんにでも器用な人だった。社交的だし、周りに敵を作らないタイプ。

私はその頃、まだ優一の事が好きだったけど、雄二は噂の時点で私の事を意識してたみたい。

その事を知った時からかしら……私は、雄二に惹かれるようになっていったのよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6936k/>

光と影

2011年1月16日02時09分発行